

と、相模守と兩人して切殺被申候。其跡より段々被參候て、なますをたゞき候様に被致候由。其節筑前守殿、脇指右の手にぬき持被申候て、何も御覽候へ、おくれは仕りはいたさぬと被申候。追付歸宅、宿にて果被申候。其時分一同に右見守を褒め候て、筑前守殿の沙汰無之候。右の首尾に候へば、筑前守殿も見事に奉存候。流石大老程有之と奉存候。

一、阿部對州・堀田加州追腹の事

大猷院様御他界の節、阿部對馬守殿追腹の事。對馬守殿は、父備中守殿大坂御城代にて十萬石に候處、別に五萬石被下御老中に被仰付候。然所に御他界の節、堀田加賀守殿、御城にて御老中へ向被申候は、私事御存知の通り、御取立御厚恩の者に候得ば、此度御供仕候。各様事、不及申儀に候得共、御幼君様御守護被成候て、御繁昌被遊候様にと奉願候。大切の時分に候へば萬端御忠勞の段、唯今より奉察候由被申候處、御老中の内より對馬守殿すゝみ被出候て、私事も御供可申由被申候處、何も驚被申躰にてとかくの挨拶無之、やゝあつて加賀守殿被申候は、是は近頃不存寄儀に候。先頃申上候通、私事は格別の事に候へば、兼てより御供仕

管と致覺悟候。御自分の事、大役をも被仰付置候。其上私共同事に御供可被成事も無之候。然ば長く當上様へ御奉公被成候て、御守立被成事第一の御忠節と存候。何も如何思召候哉。何分にも御留被成可然旨被申候へば、異口同音に御尤に候。對馬殿に御供可被成の道理無之事と被申候處、對馬殿被申候は、成程御不審御尤に候。私事、先上様御代始の時分より、一命指上可申旨申上候。此儀は親備中守も不存事に候。先上様と私ならでは、存たるもの無之候。唯今御他界候て、誰も外に知りたるもの無之候へばとて、御約束申上候事を唯今だまり候て、存命仕間敷候。唯今に候間御物語可仕候。御代始の時分、駿河大納言様を安藤右京進へ御預被遊候て、御自害をすゝめ候様にとの御使に、私を被仰付候。高崎へ罷越、上意の趣申候處、右京進申候は、御自分御使の儀に候へば無覺束儀は無之候へ共、御墨付無之候ては不罷成候。又不申候ても御連枝様の儀に候へば、何とぞ思召直さるゝ様には成申間敷哉。其段不罷成儀に候はゞ、兎に角御墨付を持參仕候へと申候て、つれなく私を返し申候。私御使に被仰付候て、右京進中に付、面目もなく罷

歸事難仕事に候へども、右京進申處尤にも存候へば、江戸へ罷歸候て右の通直に申上、且又私一分も立がたく奉存候得共、彼が申處至極と存候に付、罷歸候て此段申上候由言上仕候得ば、御意被成候は、右京進申處も、其方罷歸候所も、不届に不被思召候。此上は御墨付可被下旨にて、御自筆に大納言様へ御自害をすゝめ候様にとの御書を被下候。其時分、是は書きともなき物なれどもと御意被成候て御調、私へ御渡被成候。其時此墨付遣候上にも、右京進早速承引不仕時は如何と上意に付、私申候は其分は御構被遊間敷候。此度死不申候て不叶事に候へ共、如何にしても御兄弟様の儀は、おもき儀に候へば、御墨付と望申事、右京進尤に候故罷歸候。此上には是非に承引爲致不申候ては、不罷歸候間、最早御心安く思召候様にと直に申上候。御墨付持參候へば、右京進奉畏旨御請申上候て、私事罷歸候。此時私事は一命を指上申旨申上候事、上にも御存知の儀に候へば、唯今御他界の處、致存命をられ申べきものに候哉。此段各様にも御料簡被成候へと被申候處、其時一同に御尤至極に存候由にて、御城より加賀守殿と手を引合出被申、直に切腹

の場へ互に被來候時分、追付あなたにて可懸御目旨、暇乞して別被申候。對馬守殿義士と奉存候。此儀も初て承候故申進候。

一、駿河大納言様御生害の有様

安藤右京進、右御墨付被下候以後、何の事も大納言様へ不申上候て、俄に翌朝御居間の簾へ引付、竹のものがり嚴敷結申候。御覽被成候て、何事にか様に仕候哉と、其普請の奉行へ御とはせ被成候處、奉行申候は、何事に候哉其段は不存候へども、右京進申付候故、如此仕候。推量仕候に、何とぞ江戸より申來候哉と奉存旨申候へば、其段御聞被成候て、委細の事は間に不及旨被仰候て、其日一反古など御自身御しらべ被成、御前にて焼捨させ被成、其後御酒上り可申旨、近習に小女三人被召仕候に付、それへ被仰付候へば御酒持參候處、心能被召上、何ぞ吸物を申付候へと被仰付候て、右小女一人御勝手へ立申候。殘の二人も何やらん御用被仰付、そこを立申候跡にて、白き小袖を御引かづき被成、御伏し被成御座候處へ、御酒持て參候て、其段申上候へ共、とかくの御返答無之候故、きぬを引あげ見候へば御